

『水鏡』 皇極天皇紀の解釈（下）

〔要旨〕

平安末期から南北朝期に成立した歴史物語四鏡（大鏡、今鏡、水鏡、増鏡）のうち、『水鏡』は典拠とした歴史書『扶桑略記』の漢文記事を選択抜粋して擬古体和文で記したもので、文学的価値は四鏡中で最も低いと評されてきた。これに対して、近年主に思想面から『水鏡』の独自性について論じられ、評価の見直しが進められているが、いまだ総括的・概説的な論説が多く、各天皇紀の詳細な分析には至っていない。本稿は第三十七代皇極天皇紀を取り上げて、具体的な分析を行ったものである。（承前）

四 蘇我氏の専横記事

『日本書紀』（以下、『書紀』と略称）巻第二十四皇極天皇紀の記事から、いわゆる乙巳の変に至る蘇我蝦夷・入鹿父子の専横・暴虐の証左として研究者が注目してきたのは、以下の八つの事例である。^①

勝 倉 壽 一

- ① 皇極天皇元年七月庚辰条。^{二十七日}早魃が続いたため、大臣蝦夷自ら香炉を持って香を焚き降雨を祈ったが、^{二十八日}辛未微雨にとどまったこと。^②
- ② 同年十月甲午条。^{十二日}越の蝦夷が入朝した時、朝廷で宴が開かれた。三日のち、蘇我大臣家でも彼らと呼んで宴を開いたこと。^③
- ③ この年、蝦夷が祖廟を葛城の高宮に建てて、^{やつら}八佾の舞を舞ったこと。^④
- ④ 蝦夷・入鹿が自らの墓を造り、大陵・小陵と称したこと。そのために「^{くしぞ}国挙る民、^{おほみたからあはせ}并て百八十部曲」及び聖徳太子所有の「^{かみつみや}上宮の乳部の民」を集めて使役したこと。それに対して太子の娘^{かみつみやのいづめのみこ}上宮大娘姫王が激しく抗議したこと。
- ⑤ 皇極天皇二年十月壬子条。^{六日}大臣蝦夷は病氣を理由に朝廷に出ず、ひそかに紫冠を入鹿に授けて大臣の位につけたこと。
- ⑥ 同年十月戊午条。^{十日}入鹿が独断で古人大兄皇子を天皇に擁立しようとしたこと。
- ⑦ 同年十一月丙子条。^{一日}入鹿、山背大兄王の斑鳩の宮を襲い、皇子を捕らえさせようとしたが、山背大兄王らは生駒山に逃れた。六日にして戻った皇子は一族・妃妾と自殺し、上宮王家

が滅んだ。蝦夷が入鹿の暴挙を罵ったこと。

⑧皇極天皇三年十一月、蝦夷、入鹿は甘櫛丘に家を並べて建て、上の宮門、谷の宮門と呼び、男女の子らを王子と呼ばせたこと。

このうち、④では大娘姫王の抗議記事の次に「茲より恨を結びて、遂に俱に亡されぬ。」とあり、④の専横事例がのちの乙巳の変による蝦夷・入鹿父子の滅亡の直接の原因として位置づけられている。また、これらの専横記事の前後には、夥しい災異・祥瑞記事と、乙巳の変前後の政治情勢に関わる童謡、奇談などが配されている。まず、①から④の記事の前後には客星・地震・大雨・雷鳴・異常な暖冬・五色の大雲・大風・霰・雹・霜・月蝕などの災異・祥瑞記事が配され、⑤⑥の前後には河内国茨田郡の茨田池の変事が縷述されている。⑥⑦の間には乙巳の変の前兆をなす奇怪な報告と、乙巳の変の謀議とその成功を暗示する謡歌の解釈が、⑦⑧の間には変事の予兆記事が記されている。

これらの天変地異・異事や祥瑞に関する記事が配された政治的背景について、渋谷美芽氏は、

実際に政治的対立の手段として利用されたのではなく、『書紀』編纂時に編者の価値観、すなわちことに蘇我氏専横を印象付けるといった意図によって取捨選択、誇張などの作為をうけている可能性がある。

と説いている。『水鏡』の直接の典拠となった『扶桑略記』（以下、

『略記』）も、八箇所にわたり災異現象が政治の動向に関わる構図をそのまま踏襲している。これに対して、『水鏡』が災異現象記事の全てを捨象し、皇極天皇の三年間の治世の動きを淡々と記していることは注目値する。

『書紀』に記された八項目の蘇我氏専横記事について、『日本紀略』（以下、『紀略』）では②を除く七つの事例が挙げられており、『略記』には①⑦⑧の事例が採られている。『水鏡』も『略記』と同じである。その他の史料を見ると、『帝王編年記』巻第八には⑦⑧の事例が採られ、『愚管抄』は⑦、『神皇正統記』は⑧の事例を挙げている。入鹿が軍勢を發して山背大兄王とその一族を殺戮した上宮王家滅亡事件と、蝦夷・入鹿父子の天皇位に対する僭上・傲慢行為に焦点が当てられていくことがわかる。

しかし、蝦夷・入鹿の専横を批判する具体的な表現を見ると、『書紀』以下の諸史書類と『水鏡』の間には明確な記述用語の相違も認められる。

まず、『書紀』では乙巳の変で蝦夷側についた豪族たちを「賊の党」「賊の徒」と呼び、大臣蝦夷についても「立に其の誅されむことを俟たむ」、「蘇我臣蝦夷等、誅されむ」、「天の、人をして誅さしむる兆なり」、謡歌は入鹿が「誅さるる兆」であるとされ、蝦夷側を朝敵にあたる「賊」集団であると断罪し、蝦夷・入鹿の死を「誅」の語を用いて説明している。

『大漢和辞典』によれば、「誅」の語義と用例は次のとおりである。

○うつ。〔漢書・陳湯伝〕將「義兵」、行「三誅」。

○ほろぼす。族殺する。罪を家族に及ぼしてみなごろしにする。

〔釈文〕 誅、句云、誅滅也。

また、『日本国語大辞典』では、「誅」の語義を「罪ある者を征伐すること、罪人を殺すこと。」と記し、用例として「続日本紀―天平元年（729）二月甲戌『長屋王依^レ犯伏^レ誅』」を挙げている。

『紀略』以下の諸史書の記すところも同様である。

・『紀略』

「賊徒亦隨敗走。」「蘇我蝦夷等臨^レ誅」^{〔6〕}

・『愚管抄』

「豊浦大臣ノ子蘇我入鹿世ノ政ヲ執^レリ。其振舞宜カラズ。」「入鹿ヲ誅セラヌ。」^{〔8〕}

・『帝王編年記』

「入鹿檀專^二国政^一。」「今年。中大兄皇子与^二中臣鎌子連^一誅^二蘇我入鹿^一。」^{〔7〕}

・『神皇正統記』

「此時^二蘇我蝦夷ノ大臣ナラビニソノ子入鹿、朝權ヲ專ニシテ皇家ヲナイガシロニスル心アリ。」「中ニモ入鹿悖逆ノ心ハナハダシ。」「蘇我ノ一門久ク權ヲトレリシカドモ、積惡ノユヘニヤミナ滅ヌ。」^{〔9〕}

『書紀』編者の叙述態度について、門脇禎二氏は「その根底を流れるのは、国家的『大義』をそこなう蘇我父子に対して『天』が『人』をして加えた『天誅』であつたとする儒教的史観なのであつた」と説いている^{〔10〕}。右に挙げた諸史書が『書紀』の叙述を踏襲しているこ

とは言うまでもない。

これに対して、『水鏡』作者の叙述態度を直接の典拠とされた『略記』のそれと比較すると、そこに明確な相違性を見て取ることができる。

◇上宮王家滅亡事件

・『略記』

・一説云。宗我大臣之兄入鹿等發^二惡逆計^一。殺^二聖德太子之子孫^一。男女廿三人王无^レ罪殺害。

一説に云はく、宗我大臣の兄入鹿等、惡逆の計を發し、聖德太子の子孫を殺す。男女廿三人の王を罪なくして殺害す。入鹿之父蘇我大臣蝦夷聞而嘆言。太子々孫。横殺^二害之^一。我等亦亡不^レ久。

入鹿の父蘇我大臣蝦夷、聞きて嘆きて言はく、太子の子孫を横に之を殺害せり。我等も亦亡ぶこと久しからず、と。

・『水鏡』

・蘇我の蝦夷の大臣の子入鹿、その罪といふ事もなかりしに、聖德太子の御子・孫廿三人を失ひ奉りてき。

・いるかゞち、の大臣、これをきゝて、つみなくして太子の御のちをうしなひたてまつれり。われらひさしくよにあるべからずとおどろきなげきはべりき。

◇蘇我氏の専横と滅亡

・『略記』

蘇我臣入鹿積惡年深。濫吹為^レ事。失^二於君臣之序^一。執^二於社稷之權^一。（略）遂以^二子麿^一。令^レ誅^二入鹿^一。（略）蝦夷臨^レ誅自殺。

蘇我臣入鹿、積惡年に深し。濫吹を事とす。君臣の序を失し、社稷の權を執る。(略)遂に子麿らを以ちて、入鹿を誅たしむ。(略) 蝦夷は誅に臨みて自殺す。

・『水鏡』

かくてひとへによのまつりごとをとれるがごとくなりしかば。(略) このをりつるに在るかがくびをきりて。(略) 大臣おほきにかりて。みづからいのちをほろぼして。

『略記』は、『書紀』以下の諸史書に同じく「発惡逆計」「積惡年深」「濫吹為事」などの糾断の言辞、「令誅入鹿」「蝦夷臨誅自殺」など「誅」の字を用いて蘇我氏の専横を断罪する。これに対して、『水鏡』の作者がそれらの断罪の語彙は周到に避けて取り用いず、「つゐに在るかがくびをきりて」「みづからいのちをほろぼして」と記して、あくまで対立する二大勢力間の苛烈な権力闘争であるとの解釈を鮮明にしていることは、『水鏡』作者の歴史認識の所在を示すものとして確認しておかなければならないであろう。

群臣・衆人の支持を失った者は亡ぶしかないものであり、罪のない者を殺戮する権力行使は自らに跳ね返ってくる。父蝦夷による明確な批判と、蘇我本宗家の未来予測である。蝦夷と皇極天皇による雨乞いの成就と、民衆の喜びを記す協和政治への賛仰記事の直後に、父蝦夷を愕然とさせた入鹿の無思慮な行動を記すという構図が取られているのである。

蝦夷・入鹿の死を「誅」と記していない資料は他にも見られる。

・『簾中抄』上

中大兄皇子と中臣鎌子とはかりことをめぐらして入鹿をころしつ。入鹿が父豊浦大臣身づから火におち入てしぬ、大鬼となれり。

・『歴代皇紀』卷一

六月中大兄皇子与中臣鎌子連謀殺蘇我入鹿。(略) 大臣遂自殺。大兄皇子与鎌子連以計殺入鹿了。入鹿父豊浦大臣又自入火薨为大鬼。

『簾中抄』は『水鏡』に先だって成立しており、『水鏡』作者も披見している。

五 乙巳の変

中大兄皇子と中臣鎌子(鎌足)の謀計による蘇我氏討滅の経緯と概要を、『書紀』の記述に従って記すと次のようになる。事件の記述に挟まれた歌謡・変事等は省略した。

- ① 中臣鎌子は軽皇子に接近するとともに、中大兄皇子に接する機会を窺い、法興寺の打毬の会で、靴が脱げ落ちたのを拾って捧げたことから共に胸襟を開き、入鹿打倒の策を練る。
- ② 鎌子が中大兄に蘇我倉山田石川麻呂の女との婚姻を仲介する。
- ③ 入鹿は甘櫛岡に居宅を設け、防備を固める。
- ④ 皇極天皇四年六月庚辰、中大兄が石川麻呂に入鹿殺害の謀計を打ち明ける。
- ⑤ 同月戊申、天皇が大極殿に出御。古人大兄皇子が傍らに控える。鎌子が俳優を使い、入鹿の帯剣を外させる。

⑥中大兄は衛門府に門を固めさせ、槍を持ち、鎌子らは弓矢を帯して中大兄の傍らに控える。三韓の上表文を読む石川麻呂は、佐伯子麻呂らが来ないので冷や汗にまみれ、声が乱れ、手も震えて入鹿に怪しまれる。

⑦子麻呂らが入鹿の威勢を恐れ躊躇しているのを見て、中大兄は叫び声を発して子麻呂らとともに入鹿の頭や肩に斬りつける。驚いた入鹿は立ち上がりざまに片脚を斬られ、玉座に転んで、天皇に自らの無実を乞い願う。天皇の問いに中大兄は入鹿の不忠の罪を奏上する。天皇は立つて殿上に入御され、子麻呂らは入鹿を斬る。雨が降って水浸しの庭に、入鹿の屍が筵と蔀で覆われる。

⑧古人大兄は事件を目撃して私邸に走り帰る。中大兄は法興寺に入り砦となし、諸王以下これに従う。屍は蝦夷に賜る。

⑨蝦夷邸では漢直らが眷属を集めて軍陣を設ける。中大兄は將軍巨勢徳陀を遣わして君臣の義を説き、賊党高向国押は漢直らに戦争放棄を説いて四散する。

⑩蝦夷は誅されるに及び、天皇記・国記・珍宝を焼く。船恵尺は焼かれる国記を素早く取り、中大兄に奉る。蝦夷・入鹿の葬儀を許可する。

『略記』は、『書紀』の記述内容を簡潔にまとめているが、⑤⑧の古人大兄関係の記事、及び⑧⑨の記事は省略されている。『水鏡』の記すところも『略記』の記述内容を踏襲したものと思ないうるが、前述したように、蝦夷・入鹿に対する断罪の言辞は周到に避けて取り用いていない。また、⑦の入鹿の屍が筵と蔀で覆われ、降雨のな

かに放置されたことも省かれている。

中大兄と鎌足の謀殺計画の周到さと、斬殺役を命じられた廷臣の怖じ恐れるさま、殺戮の生々しい記述など、『水鏡』作者の筆はリアルな客観的記述に徹し、史実を受けとめた作者の感懐の表出は徹底的に抑制される。それが歴史叙述の一つの方法であった。『略記』の記事の単なる仮名交じり文への変更や、物語的表现への翻案にとどまるものではない。そこには乾いた筆致と歴史の動きを見詰める冷徹な眼が認められる。小峯和明氏は「悲観主義にも近い深い絶望」を抱えつつ、「絶望の淵に立つて過ぎこし時代をふり返り、今も昔も変わらぬ人の世の動きを冷静に見すえようとする眼」「醒めたまなざし」を感じ取ることができる⁽¹⁵⁾と説いている。

一方、『水鏡』の乙巳の変の記述で注目されるのは、中大兄と鎌子の接近記事中に示された次のような作者の感懐である。

三年と申し三月に。天智天皇の中大兄皇子と申し⁽¹⁶⁾。法興寺にてまりをあそばしたまひしほどに。御くつのまりにつきておちてはべりしを。かまたりのとりてたてまつりたまへりしを。皇子うれしきことにおぼして。そのときよりあひたがひにおぼす事。つゆへだてなくきこえあはせたてまつりたまひて。その御すゑのけふまでもみかどの御うしろみはしたまふぞかし。よき事もあしき事も。はかなきほどのことゆへにいでくる事なり。

傍線部は、的確な状況判断と決断、行動により、のちの藤原摂関家の繁栄の礎を築いた鎌足の深謀遠慮への嘆声が込められている。皇権奪還のために蘇我氏排斥の機を窺う中大兄の心中を忖度し、密

かに取り入って権謀の才を働かせ、首尾よく当面の政敵蘇我氏を滅ぼすのみならず、以後の四百年にわたる藤原氏の専権への道を開いた鎌足の事跡を評価しているのである。

「よき事もあしき事も。はかなきほどのことゆへにいでくる」とは、中大兄への接近を契機として天皇家との外戚関係を形成し、大伴氏や紀氏などの有力な政敵を排除して、平安時代に至るまで絶対権力を確立した藤原氏の外戚政治への道を振り返り、清濁併せ持った摂関政治の継続の必然性に思いを致したものである。そのことはまた、討滅するほどの罪科のない山背大兄王一族を滅ぼして人心の離反を招き、政敵物部守屋を倒して得た祖父馬子の功績を無にした入鹿の短慮への批判をも含むと言ってよい。父蝦夷に「つみなくして」と慨嘆させた所以である。

六 説話の位相

皇極天皇紀の末尾に配された嬰兒が驚にさらわれた話は、『日本霊異記』（以下、『霊異記』）上巻「みどりこ嬰兒、驚に擒はれ、他国にて父に逢ふこと得し縁 第九」、『今昔物語集』巻第二十六「タヂマノクニニシテ於但馬国驚、ミツゴラツカミトレルコト鰐取若子語第一」に出ている。この話は『書紀』『紀略』『愚管抄』『神皇正統記』などの史書類には見られないが、『水鏡』が直接の典拠とした『略記』には「已上霊異記」として出る。『水鏡』も『略記』から引用したと思われる。

いま、注目しなければならないのは、その説話の時期設定と、説話記述者の感懷を記した末尾の一節の相違である。

説話の時期設定については、『霊異記』に「飛鳥川原の板葺ノ宮いたフキ

あめのしたをさに宇御めたまひし天皇のみ世、癸卯の年の春三月の頃」、すなわち皇極天皇二年（六四三）の出来事とし、八年後の「庚戌の年の秋八月下旬」、すなわち孝德天皇の白雉元年（六五〇）に父娘が再会したと結んでいる。『霊異記』に材を得た『今昔物語集』は「今は昔」という常套表現を取り、年月記載はない。父娘の再会の時期も「其ノ後十余年ヲ経テ」とあり、『霊異記』とは異なる。

『略記』は『霊異記』に同じく時期を「同代、みづのとう癸卯年春三月」「かうとく孝德天皇の代、かのえいぬ庚戌歳秋八月下旬」と記している。著者皇円は皇極紀を執筆するにあたり、その治世に起きた奇談として『霊異記』からこの説話を加えたのであろう。しかし、蘇我本宗家の滅亡に至る乙巳の変の記述とこの説話の間には、孝德天皇の即位に至る経緯、釈迦入滅から一五九一年にあたること、皇極天皇の婚姻のことの記事が挟まれており、皇極天皇の治世の政治の動きと殊更に結びつける意図は認められない。

これに対して、『水鏡』は奇談の内容そのものは『略記』からそのまま踏襲しているが、時期設定については、「そがの一門とときのほどにほろびうせにき。」という乙巳の変による蘇我本宗家の滅亡記事に続けて、事件の発端を「この御ときとぞおぼえはべる。」、父娘再会の時を「その、ち八年といひしに」と結んでいる。上宮王家滅亡事件、乙巳の変から、古人大兄の謀反、讒言による石川麻呂の自経に至る皇極・孝德の治世八年間の熾烈な政治権力闘争を背景に、この説話を語ることが意図されていたと思われるのである。

次に、説話記述者の感懷は、それぞれ説話の末尾に次のように記されている。

・『靈異記』

誠に知る、天哀びて資くる所、父子の深き縁なることを。是れ奇異しき事なり。^⑬

・『今昔物語集』

実ニ此レ難有リ奇異キ事也カシ。驚ノ即チ噉ヒ失フベキニ、生乍ラ巢ニ落シケム、希有ノ事也。此レモ前生ノ宿報ニコソハ有ケメ。父子ノ宿世ハ此クナム有ケルト語り伝ヘタルトヤ。^⑭

・『略記』

子入ニ死門一。再得ニ蘇生一。誠奇異事矣。

子、死の門に入るも再び蘇生することを得。誠に奇異の事なり。

・『水鏡』

このことをさくに。あさましくおぼえてなきかなしびて。おやこといふことをしりにき。人のいのちのかぎりあることは。あさましくはべる事なり。

『靈異記』の説話は儒教的な世界観から、その再会を「天哀びて資くる所」と記す。新日本古典文学大系『日本靈異記』の脚注には「儒教的な文飾といえよう。親と子との関係を主題とする説話に『天』が述べられることが多い。」とある。一方、『今昔物語集』の説話は「前生ノ宿報」「父子ノ宿世」という仏教的運命観から奇談を説明している。同じく『靈異記』を典拠とする『略記』は、儒教的世界観や仏教的運命観を離れて、説話の末尾を『靈異記』の末尾文に採り、「誠奇異事矣」と述べて、あくまで当代の一奇談として捉えている。

これらに対して、『水鏡』は「人のいのちのかぎりあることは。」

あさましくはべる事なり。」と結ぶ。文意は「人間の運命というのは、見えない所で、それぞれに決められているのだなと思うと、呆れるばかり心動かされた話でしたよ。」となる。この結語は数奇な運命を辿り偶然の再会を果たした父子の逸話に対するものであるばかりではなく、その前に位置する皇極天皇・蘇我蝦夷・入鹿父子、山背大兄王一族などの命と運命にも通底していくものであると云ってよい。金子大麓氏は『水鏡』に収められた説話について「それが収載された天皇紀の記事の内容に対する何等かの批判、諷刺、訓戒の意向を感じさせる」ことを指摘し、「皇極紀の『驚にさらわれた童女譚』は蘇我一族滅亡の記事に照合させ『人の命の限りあることはあさましきことなり』という教訓的感想で波瀾万丈の皇極紀を結」んでいると説いている。^⑮

このことを踏まえて、皇極天皇紀の構成を確認すると、

- ① 皇極天皇・蘇我蝦夷の善政
- ② 蘇我入鹿の暴虐
- ③ 山背大兄王の莊嚴な死と蝦夷の慨嘆（上宮王家滅亡事件）
- ④ 中大兄皇子と中臣鎌足の入鹿謀殺計画と酸鼻な結末（乙巳の変）
- ⑤ 無名の少女の数奇な運命と父子の無事な再会

となり、①の善政賛美と⑤のほのとした民衆奇談に挟まれて、②③④の酷薄・酸鼻な政治闘争の史実が無感動に生々しく語られる。蘇我氏と山背大兄王一族、中大兄・鎌足と蝦夷・入鹿父子という、互いに政敵を地上から抹殺せねばやまない救いのない権力闘争

を中核に据えて、その狭間で傀儡でしかない女帝の悲劇と、それらとは無縁な庶民の秘話が語られる。その対照には、金子氏の説かれるような天皇紀の記事内容への批判・諷刺・訓戒の意図とともに、自らも属する宮廷社会の絶えることのない血生臭い権力闘争の歴史への作者の慨嘆と、批判が含まれていると捉えるべきではなかろうか。

〔注〕

- (1) 『日本書紀』は日本古典文学大系『日本書紀 下』に、『水鏡』は新訂増補国史大系所収の流布本を用いた。また、『扶桑略記』は新訂増補国史大系所収本に拠り、『訓註 扶桑略記 七』(『芸芸研究』七五、一九九六年二月)の訓読文を添えた。
- (2) 直木孝次郎著『日本の歴史2 古代国家の成立』(一九七三年、中公文庫)一五九頁。前田慎一「皇極紀・斉明紀に関する一試論」(『東京家政大学研究紀要—人文科学』二四、一九八四年)。
- (3) 前田氏は①③④⑧の事例を挙げている。
- (3) 門脇禎二著『大化改新』史論 上巻(一九九一年、思文閣)「第二章 上宮王家滅亡事件」。門脇氏は②③④⑤⑧の事例を挙げている。
- (4) 鎌田元一「七世紀の日本列島—古代国家の形成」(『岩波講座 日本通史 第三巻 古代2』一九九四年、岩波書店)。鎌田氏は③④⑤の事例を挙げている。大津透著『天皇の歴史01巻 神話から歴史へ』(二〇一〇年、講談社)二七五頁。大津氏は③④⑤⑥⑦の事例を挙げている。
- (5) 渋谷美芽「舒明・皇極朝の政情と蘇我氏」(『日本古代の社会と政治』所収、一九九五年、吉川弘文館)。
- (6) 『新訂増補国史大系10』所収。
- (7) 『新訂増補国史大系12』所収。
- (8) 日本古典文学大系『愚管抄』に拠る。
- (9) 日本古典文学大系『神皇正統記』に拠る。
- (10) 門脇禎二前掲書「第三章 蘇我本宗家滅亡事件」。
- (11) 『改定史籍集覧第十八冊』所収。「大臣」欄には「蘇我の蝦夷天皇四年六月被誅」とある。
- (12) 『改定史籍集覧第廿三冊』所収。
- (13) 勝倉壽一「『水鏡』継体天皇紀の問題—『扶桑略記』唯一典拠説をめぐる(1)—」(『解釈』六一巻九・一〇号、二〇一五年一〇月)。
- (14) 『新編日本古典文学全集 日本書紀③』頭注の梗概を参考にした。
- (15) 小峯和明「『水鏡』—仏法思想に基づく史観—」(『国文学解釈と鑑賞』五四巻三号、一九八九年三月)。
- (16) 日本古典文学大系『日本霊異記』に拠る。
- (17) 日本古典文学大系『今昔物語集 四』に拠る。
- (18) 河北騰著『水鏡全評釈』(二〇一一年、笠間書院)一九二頁。
- (19) 金子大麓「水鏡総論」(『歴史物語講座 第五巻 水鏡』一九九七年、風間書房)。